



蛸親爺

第4話 山の奥

雅雲がうんすくね

「たーこたーこ、たーこたーこ」と蛸が午過ぎに町医者の前に行く。
口を絞って手に提げた頭陀袋ずだぶくろは、ウイスキー瓶の形に膨らむ。頸には包帯を巻いている。

青年が医院の戸から、短い草のまじる庭の砂利を踏みつつ、開け放たれた門に下って来た。

出たところで右を向く。蛸には背を向けた形となる。

蛸が青年に追い縋った。

「いやいや、ちよつと、蛸だよ。蛸。こんにちは。妙な所で会いますなあ。

小川さん、どこか患ったのかい」

「僕はアレルギーで」

「ああそう。ありゃ痒いらしいねえ」

「魚介類を生そのまま食べるとじんましんが出て、赤く腫れるんです」

「小さい頃からそうなのかい」

「いえ、この間、ぬた膾なまはを食べたら全身にじんましんが出て。お医者さんの言うには、過度のストレスがかかる場合、今まで反応しなかった物でもアレルギー反応が出て、それからはストレスが引いても、アレルギー反応だけが残ることがあるそうです」

「ストレスって何かしてたの」

「ええ、ちよつと合わない所でアルバイトをしていました」

「おれが蛸になっちまったのもアレルギーかも知れねえな」

「はあ」

「でもどうなのかね。痒いの我慢して、食うべきもん食って栄養取った方がいいのかね」

「アレルギーは、じんましんばかりではありませんよ。花粉症や喘息、酷いとショック症状を引き起こします」

「へえ、そうなの。おれは、じんましんのことかと思ってた。また気取って横文字にしていやがるなって。で、帰する所はストレスなんでしょ」

「僕の場合、そうらしいです。あまり実感はありませんが」

「いや、体を信じないと。今や、ストレスは万病の元だな。大事にしねえと」

散歩犬が往来に行く。爺さんを従えて、蛸と青年を過ぎた。辻に出て脚を踏ん張り、右、左と見る。飼い主は電信柱に結び合わせた『男の身だしなみ 徒歩三分』と書かれた看板を見ている。

「昔っからあるけどな。『^し獣食った報い』』と言ってな。隠れて変な肉食うとじんましんが出るもんだ」

「僕もアレルギーになるとは思ってもみませんでした」

「おれなんか、下宿のおかみアレルギーだ」

「対人恐怖の一種ですか」

「おかみの出す物音ひとつ聞いただけで竦み上がる思いだ。おかみが戸を引く音で、動きが止まっちゃうのよ。ショック症状だな。それから息を潜めて、おかみが動きをやめてから、ようやくまた動けるから。朝に目が覚めたら、まずおかみが家のどの辺にいるのかを気配で探って、それで蛸壺から足を出して、まわりを確かめてから起き出すのよ」

「起きるのに、手順があるんですね」

「手順ちゆうかな、おかみの姿を見たら、それこそパニックだ」

「それも広い意味でのアレルギーでしょうね」

「そうだな、あれだ。三年寝太郎だ」

「昔話ですか」

「そう。おれもなあ。三年くれないかしら。三年でなんとかするから。そつとしておいてくれないもんかね」

「三年寝太郎はそういう話でしたか」

「まあ、ありゃ、坐食している者をそしるわけだが、しまいに、長者の娘を得るだろ。長者の娘ってのは象徴で、つまり富と名声だ。三年三月って

いう期間も象徴で、長い間のことだ。長い間世間から外れていた者が、策略をめぐらせて富と名声を得るといふ、そういう話だ」

「富と名声ですか。世間から外れていたら、皆が物珍しがって、そういう結論になるんでしょうか」

「ある程度、世間から離れてみねえと見えねえものもあるのよ」

「そういえば、アインシュタイン博士は、書齋に二週間ほどこもって、相對性理論を考えたとさうですし、若冲なども一年間、鶏を観察し続けたりしていますね」

「だろ。寝太郎だって、いっぱしのもんになったから、めでたし、めでたしだが、それまでは『寝太郎』ってのらくら扱いだっただけだから」

「寝太郎」って言いたかったんでしょね。ほかの人たちも言っているし」

「例えはある種の三年寝太郎が、寝ながら大根畑の肥料のことでも考えているとするだろ。その話をまわりの農人が聞いて、『夢見てえなこと考えてねえで、畑へ出る』とその場で足を踏みかえる。ある日、殿様の耳に届いて、『それは理に適った考えだ。ぜひそうしよう』って、やってみたら今までの二倍も三倍も大根が取れる様になった。やってみるとは変らないうが、収入が違う。たちどころにして大尽だ。それを見て農人曰く、『やはり大した者だ』と掌を返すわけだ」

「掌返し」ですか。昔話に出てくる大衆の得意技ですよね」

「寝太郎」って呼び捨てにしていた者が『三年さん』なんつってな」

「太郎さんになるんじゃないですか」

「寝太郎がよ、畑に出たって、せいぜい喘ぎながら下働きがせいぜいだ。体壊すのが関の山だろ。大体、世間の奴はサラリーマンをなめてる。サラリーマンだって、やすやすと出来るわけじゃねえ。おれは勤続三十年だ」
そこに看護婦が下りて来た。

「あら、蛸さん。ご加減はいかがかしら。痛みますか」

「ああ、こりゃどうも。ちと痛みますがね」

「あまり痛む様なら来て下さい」と門を閉める。

「まあ、今日は大丈夫でしょう」

「お大事に」

「そういや、小川さん、午飯食った」

「いえ、まだ済ませていませんが」

「それじゃ、一緒にどうよ」

「魚は食べられません」

「それならロールキャベツ食いに行こう。今日はロールキャベツか烏賊素
麵かで決めかねてたんだよ」

「ええ、いいですね」

「だんだら坂を蛸と青年が連れ立って歩く。

「おじさんの頸の包帯はどうしたんですか」

「ああ、これね」と頸の後ろに足をめぐらせて盆の窪を示した。

「ここに出来物でさちやって。一昨日メスを入れたのよ。その後、傷口に
綿を突っ込んで、ぐりぐりされてよ。痛えのなんのって。麻酔もしなかつ
たからな」

「麻酔なしですか」

「いやね。先生が切るか、薬で散らすか、どっちを選ぶかって聞くから、
それじゃ場所も場所だから、薬も剣呑だ。切る方で。とのわけよ」

「原因はわかったんですか」

「それがよ。山へ行って、猿山の風呂に入ったらよ。これができちまっ
て。先生に診てもらったら、『汚れですよ。皮膚の間に汚れが入っていま
すよ。何をしていたんですか』って言われてさ」

「何をしていたんですか」

「先生と同じことを聞くねえ。何、ちいと遠くへ行ってたのよ」

「おじさん、最近いらっしやいませんでしたね」

「おお、そうなんだ。就職してたんだよ。再就職だよ。この年で。いつま
でもその日暮らしてはいられないから」

蛸と青年は路地を抜け出し、甘栗屋が釜を据えて栗をかき混ぜている角
を曲って商店街に入る。『赤れんが』と丸太を縦に割った柱に白のペンキ
で書かれた、めし屋へ入った。

店は木のテーブルにベンチといった作りで、天井からは青黒い鋳物のラ

ンブが下がる。

空いた席に差し向かいになるや、蛸が足を二本掲げて、

「キャベツ巻き、二つね。いいよね」と店の奥に続いて、青年に念を押し
た。

「ええ、いいです」

「ここのはなんと言ってもキャベツ巻きだな。ああ、あと、ビールね」と
再び奥へ告げた。

「それでさ、職安から出てきたら、『仕事あるよ』って声をかけられたのよ。
振り返ると、節くれだった太い杖を突いた男で、胡散臭いな、と思ったけ
れども、とにかくあの時は働き口が欲しくてな。のべつに探そうと思って
いたわけじゃないが、ともかくも働いて、この居堪れねえ生活から離れた
いと思っていたから。仕事は山の仕事だって言うんだ。この年でさ、山稼
ぎもどうかと思ったが、一年だけだったことだったし、なにしろ下宿のお
かみの蛸扱いが腹に据えかねて。この間なんて、おれが縁側で猫になり
節をやっていたのよ。そうしたら、『墨でもかけてあげたらよござんしょ。
蛸の墨はイカより味がいいって、聞きますやね』

こっちも三万も払ってやってるのに挫けそうになるわ。その上おかみは
三万くらいなんでもねえと思っていやがる。そのくせ何としても取るうと
思っていやがる。誰のせいで、おれがこの年になって山に行くのか見せつ
けてやりたくなってな。それが、『あらそうですか。健康には気をつけな
さって下さいよ。私もね、蛸さんの新しい商売でも始める元手を出してあ
げたいんですけどねえ。いえ、今度の旅費くらいは出せるんですけどね。
いえ、私もねえ』って、肚にもねえことべらべらと喋くりやがって、活気
づいてんだよ。渡世の品をまとめて下宿を出た時は、まあ、せいせいした
わ。雨だったけどな」

「おまちどうさま」と給仕がロールキャベツと皿に盛ったご飯、ビールを
運んできた。

「ああ、グラスは二つね」と蛸はコップが一つしかないのを見て給仕に命
じた。

「僕はいいですよ」と青年が制した。

「ああ、そう」と蛸は一杯あおって、

「おれはこう見えても、町育ちでな。ろくに一人旅もしたことがないんだ。それが今度は山仕事だつてよ。妙な興奮だつたね。しがらみを捨て切った解放感と、これから待ち受ける労働への不安と」

「僕も留学に出発した際はそんな気持ちでした」

「うん、まあ、そんなとこ」と蛸は手酌でビールを注ぐと、一度に飲み切った。

「フェリーに乗って着いた港町から案内の通りにバスに乗ってよ。小一時間山道を揺られたか。窓から見たら、行く手には赤錆色の山が正面に立ちだかっていた。終点に着いたんだが、それが一つ手前から離れてて、客はおれ一人。降りた所がおれの新天地よ。バスは帰っちまった。どこの荒野あれのかと思ったね。」

小屋が一つ、二つと、道しるべのつもりか、二本松があるだけ。赤い土の上には石がごろごろしている。小さな流れがあったが、流れなかった、錆び色の水がちよるちよるしているだけ。男が立っててな。迎えに来た男は三十か四十か五十か、とんと年がわからねえ男で、麻の着物で、やっぱり杖を突いて。『おめえは先月いなくなった男の代わりだ』とか言うのよ。いなくなったって、どうしていなくなったんだか。男が歩きだしたから、おれも仕方なしについて行く。うねくねとした凸凹道を一、二分行くと林に入って、そのうち道が登りになる。男は黙ってる。ひたひたと男の草履の音に引かれて山へ分け入る。気づけば下って、又登って、木板を踏んで流れを渡る。転がる石が赤くなる。木の肌は黒くなる。どこをどう通ったか、どれだけ歩いたか見当のつかねえほど歩いた。息も上がって、膝が笑って、日も翳って。一つの小屋に着いたのよ。そこが、地べたにいきなり障子が立ててある様な所でさ。剥き出しの壁は青黒くて、藁屑になりかけた畳が立てかけてあった。

手前が土間で木箱が積んである。上り口があるから入れれば誰もいない。そこに、裸の男が机の下から現れた。数人の男が床にはいつくばっている。それが皆、禪みんとしで雑巾を手にしている。何だこはと思つたら、『洗濯したから溢れたんだあね』と一人の筋骨逞しくて日焼けしたのが、と言つても

全員その姿なんだが、そいつから雑巾を渡された」

「自己紹介前に仕事ですか」

「まずは、床掃除して。土間に山と積んである木箱を運び入れる。これが重くて。なかは反物なんだけどな。反物も、箱一杯だとこんなに重いのか。と思うくらい。これを運んでは蓋を外して、二十万とか、二百万とか書いてある値札を取って、巻き直してから値段ごとに箱に戻す」

「それを山奥でやるのがわかりません」

「おれだってわからねえ。いや、いくら棒給のためとはいえね。何だかわからないのよ。重たい箱を担いで、裸族じみた男どもと機械的な仕事をする体たらくに。『坐り込んでするな』とか言われたけれどもな。蛸だし。奴らみたく、片膝立ちでやってられねえよ。あれだよな。ふつう、こういう労働ってのは何か唄いながらするもんだろ。田植え歌に茶摘歌。樵歌に馬子唄。どこの国の民謡にだってあらあ」

「ロシア民謡の『ボルガの舟歌』なんてそうですよね」

「えいこーらー。やれこーらー。えんやこりやとやれこーりやー」と蛸は舟を漕ぐしぐさをする。

「日本語の歌詞までは知りませんが」

「ロシア民謡を聞きゃあ感じるが、ありゃ不平を鳴らしてんのよ。やってらんねえつつう、不服の申し立てに節つけて歌に仕立て上げてるんだ。それがその連中ときたら、一向に口をきかねえの。黙したまま。禪のまま。聞こえてくるのは何かがさしる音ばかり。まわりを取り巻く空気に胃から何かがせり上がって来る様で。ああ、蛸だから、下がって来るのか。そうだよな。それで唄えねえ、音楽もねえならどうするか」

青年は湯呑みを取って、お茶を飲む。

「頭のなかで音楽を流し続けるのよ。自分で。それが知らぬ間に唄ってるのよ。口を結んだまま。唄うことで目の前の苦役も、蛸になっちまってこんな小屋で働く己も薄めちまう。先も考えねえで、ただ目の前の箱を運べばいい。」

それをどれほどやったか。とつづくに日が暮れて、ようやく晩飯よ。何が出たと思う。まったくこのキャベツ巻きが殿様の食い物かと思うね」

蛸は一休みし、割り箸でロールキャベツを頬張り、二、三度嚙む。井鉢を持って、盛られたご飯を口に入れた。

「ああ、うまい」

言いつつ、テーブルのソースさしを手に取り、楕円形のシチュー皿に垂らし込んだ。

「これがね。隠し味なのよ。小川さんもかければよかったのに」

「郷土料理にも数々ありますよね」

先にロールキャベツを食べ終えた青年が聞く。

「碗に入った汁と飯なんだけだよ。その汁に白いぶよぶよした物が入ってるのよ。ピーナッツくらいの。何、とにかく食べるんだろう、と食ったらぐにぐにしてさ。『これは何ですかい』って聞いたら、『山いか』だって言うんだよ。山いか。知らねえな。って、また聞いたらば、なめくじだって言うんだよ。いや、それからは具なしの汁ばかりよ」

蛸はシチューをスプーンで口に入れ、ビールも手ずから注いで飲む。

「食べなくてよかったと思いますよ」

「山いかは、その辺にいた犬ころにやったわ。そうして一週間ばかり立った日の晩、『あの蛸、役に立たねえから明日あたり、煮て平らげちまえ』とか頭のとんがった奴が言ってんだよ。まあ、聞こえる様に言ってんだから、冗談半分の当て擦りなんだろうが、いずれ冗談でなくなるかもしれない。次の日は午まで休みだよ。休みだったって何をするでもない。まわりは禿山。始終風が吹いている。雲を見るよりほかにないわな。あんなものは、生活でも何でもない。今やってる事が、よくない未来につながってるなと感じたら、とっととやめりゃあいいのよ。おれは降りることにした。左の山には百足ひかてが数知れずいるってえから、右の山から奔ろうと思ったね」

「バスで帰らなかったんですか」と青年はお冷のコップに手を伸ばした。

「それが、おれもやめだやめだって思ったから、尋ねたのよ。『バスの始発は何時くらいなのか』って。そしたら『バスって何だあね』ときたからね。『いや、バスで来たんですがね』『ありゃ、新入り連れてくる時だけ、終点の先まで運ぶんだあね。戻るバスなんかねえね』『ああ、そんなもの

ですかい』

ぶらぶらすると見せかけて、小屋から見えねえあたりで駆け出した。財布だけ持って。あんな辺境、金の意味がねえから奴等も手をつけなかったからな。石ころ路を奔ったんだが、さすがに迷っちゃまって、しかも路は石くれだらけ。加えて葉っぱが吸盤にからまる。足と足を擦り合わせて、吸盤の薄皮ごと離していたら、小屋にいた奴と出くわしちまって。散歩で道に迷ったとか何とか、ごまかそうかと思っただが、めんどくせえから墨を吐きかけてやったわ」

「落ちのびているみたいですね」

「それで麓への道を探していたら、どこから来たのか、初日から見なかった案内の男とばったり会っちゃまってよ。これもまた墨を吐いてな」

「おじさんにはいい武器がありますね」

「いや、こいつがとんと効かねえ。杖で突いてきやがる。後れをとったら宙吊りにされて、下手すりゃ干し蛸よ。そこに、犬の吠え立るのが聞こえてな。山に住んでいた犬が力一杯吠えながら駆けて来た。男は、飛び跳ねて逃げ出したが、足元の草に引っかかって転んじまった。犬は、両目の上にそれぞれ斑のある犬でな。おれだけに懐いていたんだ。『山いか』をくれてやったからな。犬が振り向いて呼ぶからついで行くと、一つの路が細く通っていてな。おれは犬に引かれて、麓まで下りたら海が広がっていた。どこにでもありそうな、ひなびた漁村って景色だ。漁船が休んでいて。午過ぎに着いたから港ものんびりしてて。犬もいっしょに昼寝かな。つう感じだ。

いや、助かった。ここで気を緩めてはなるまじ、岩場から水に入つてよ。蛸だからお手のものよ。少し沖へ出たところで手を振って、犬ころに、『ありがとよ』って、そしたら犬ころも、『わん』って尻尾振ってさ。

港へ回って、船の出るところで底に貼りついた。この吸盤のおかげよ。一週間ぶりだ。汽笛とともに出発だ。禪どもともおさらばだ。陸地に着いた時はほっとしたねえ。体がぐにゃぐにゃになったもんだよ。さっそく、その辺の暖簾をぐぐってさ。いやあ、金を使えるってことはありがたいね。一人前として扱われるんだよ。蛸でも。あの山奥じゃ、誰もおれの言うこ

となんか聞いてくれないもの。まったく信用経済さまさまだ」

蛸はこの時ばかりとビールを飲む。

「船底から上がってもよかったんじゃないですか」

「券持ってねえし、途中から小判鮫と、ともに舟底にくっついて相連れになつたからな。そうしたらよ、岩陰にうつぼがいてさ、こっちに上がって来るんだよ」

「小判鮫とは鮫の名ですか」

「え、ああ、鮫と名がついてはいるが、鮫とは違うんだ。おれといたのは一尺ばかりの奴だ。頭の上に、小判みたいな形の吸盤を備えていてな。自分より大柄の魚や船に貼りつくのよ。その小判鮫はよく海亀にくっつくと言つてたっけ」

「くっついてどこへ向かうんですかね」

「おれも尋ねてみたら、『わからない』だと。そんなんで済むのかねって聞いたら、『僕等は海のどこへ行っても大丈夫。あんまり遠くへ行くようならば、離れてまた別の物を探す』とのことだ」

「大きい魚にくっついて、ほかの魚に食べられない様にするんですかね」
「そうらしいな。なかなか剥せねえらしいぜ。おれの吸盤とはものが違うな。離すにゃ、小判鮫の体をつかんで前に押し出す様にしねえといけねえそうだ」

「おじさんは、今はどちらに住んでいるんですか」

蛸はビールを一息に干した。

「ういーっ。山本のおかみの所だよ」

「また下宿に納まったんですか」

「居酒屋からおかみに電話してよ。『戻ってもいいか』って聞いたら、『えっ』とかぬかしやがる。むかつ腹がたつたがしょうがない。それにつけても合わねえ所にいるもんじゃねえな。まったく、あの山に行つてから、物忘れは酷くなる。物覚えは悪くなる。気がつけば頭のなかで唄ってる。ああ、まったく、今こうして小川さんとしやべつていても、ふとした間に頭では演歌が流れ出すんだよ。ああ」と蛸は、空のグラスを握り締めながら、頭を振った。

「自動再生ですね。それにしても、よく帰ってこられましたね」

「ああ、犬ころのおかげよ。おれの爺さんなんてよ。戦前に樺太の原野に職を求めたのよ。そしたら、まあ、行ってみたら灯台守だったらしくてな。爺さんも抜け出そうと思った。もっとも樺太だ。下手に出たら遭難よ。そこで爺さん、賢明だったね。春を待ったのよ。春を待って雪が解けたら、とんずらしたんだとさ。さて、ごちそうさん。おあいそ」

青年が財布を出そうとするのを、蛸がとどめた。

「ああ、いいって、いいって、おじさんに任せなよ。そのお金でノートでも買っちゃって」

「ごちそうさまです」と店を出てから青年は礼をした。

「いいってことよ。じゃ。たーこたーこ、たーこたーこ」

道端で草の間をつついていた雀が、蛸の身近を飛び去った。

〈つづく〉